

第6回 JLPP 翻訳コンクール スペイン語部門講評

スペイン語文学研究者、東京大学大学院総合文化研究科教授
斎藤文子

今回初めて設けたスペイン語部門では、応募数が思いのほか多く、スペイン語による日本文学翻訳への関心の高さを実感しました。本審査に残った応募作はどれも力作でそれぞれに優れた点がありましたので、審査委員会ではどこを評価するかで意見が分かれ、熱のこもった議論が交わされました。

私が審査する上で特に重視したのは次の二点です。一つは課題作品の内容をきちんと理解できているか。もう一つは、作品の全体の雰囲気や文体、文章の息づかいをどこまでうまくスペイン語で再現できているかです。

鹿島田真希の「波打ち際まで」は、女性の不安定なふわふわした心理や生理的な感覚をそのままふわふわした文章で綴っているような小説ですので、主人公の人物像をどのくらい把握できているか、またその息づかいをどのようなスペイン語にしているのかがチェックポイントとなりました。登場人物たちは相手が言っていること、考えていることをよく消化できないまま、かみあわない会話をしているところがあり、その曖昧なやりとりがうまく表されているかも見ました。

一方「お辞儀」は、「波打ち際まで」とは異なり、テンポのよい軽快な文章で、向田邦子の鋭い人間観察眼が光るエッセイです。伝統的な価値観を持つ両親を中心とした向田家の家族関係や、お互いを思いやる気持ちを読み取って、それをふさわしいスペイン語にしているかを中心に評価しました。例えば、入院中の母を見舞いに行った帰りに弟がつぶやく「たまんねえな」は、ぴったり合うスペイン語がありませんので、向田家の親子関係を理解した上で、適切なスペイン語の表現を探さなければなりません。訳者のセンスが問われる箇所です。また向田邦子の文章のテンポの良さやユーモアが伝わってくる文章になっているかも訳出上のポイントになります。

最優秀賞と優秀賞になった応募作品は、上で述べた点で特に優れていました。今回は残念ながら受賞に及ばなかった方々は、ぜひまたチャレンジしてください。